

## 「ジオパーク活動」と「郷土史研究」の相互連携の強化を！

ジオパークとは、「地質・地形から地球の過去を知り、未来を考えて、活動する場所」であることが日本ジオパークのホームページに記されている。「地球の過去」すなわち「大地の物語」は、地球の誕生以来、とてつもなく長い時間をかけて幾重にも折り重ねられた物語である。

足摺岬は、四国最南端の太平洋に突出した岬である。現在のように Google マップや航空写真のない中世は、室戸岬や紀州熊野などとともに日本国の最南端として位置図けられ、補陀落信仰のメッカであった。

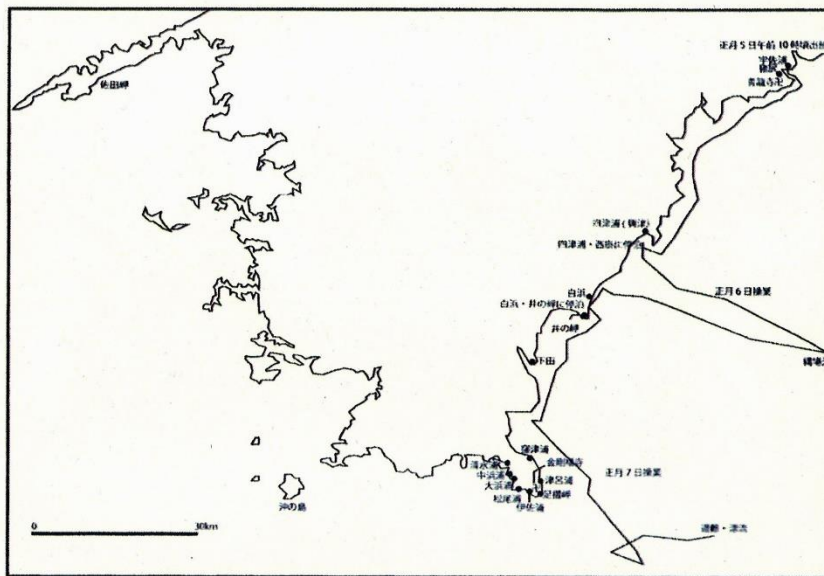


図1 正月5～7日の万次郎等カツオ船の推定航路(田村公利作成)

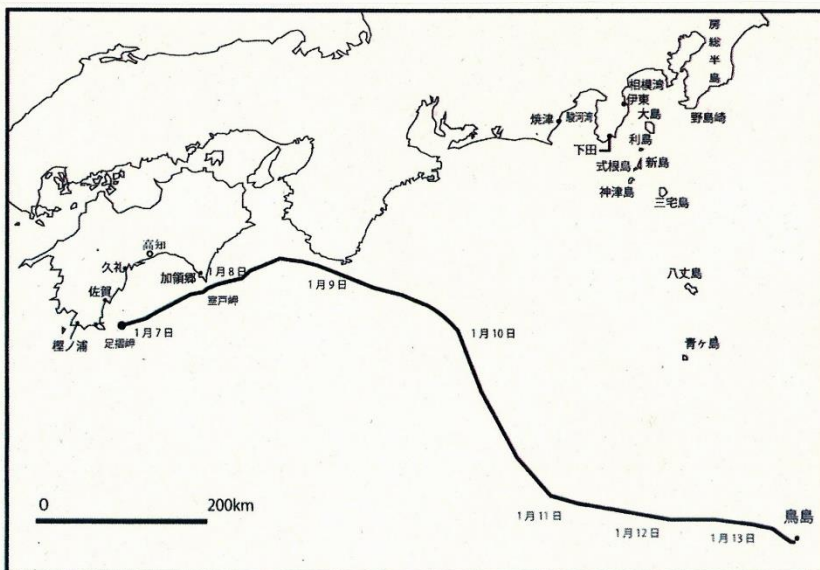


図2 正月8～13日の万次郎等カツオ船の推定航路(田村公利作成)

近世末、天保12年正月5日、船頭筆之丞が指揮を執る全長4間(約7.6メートル)のカツオ船は万次郎等5名を乗せ、土佐湾岸沿いに延縄漁を行いながら、足摺岬沖カツオ漁場に向かい南下した。これは土佐湾岸を流れる海流(湾岸流と反転流)を利用しての航行であった。また、足摺岬沖はこの湾岸流と黒潮が複雑に交錯し、これに様々な方向からの風が加わる。古来、船舶航行が難しい海域として認知されている。万次郎等5人が絶海の孤島・鳥島に漂着したことは、地形と地理的要件が大きく影響している。

黒潮に流されたのは何も万次郎等5人ばかりではない。『土佐國群書類従巻七八』所収の「八丈島漂渡記」には、延享二年(1745)12月、清水浦の廻船業者2名と紀州人2名の計4名が、臼碇沖で船ごと流され、八丈島に漂着し、約7か月後に清水浦に

戻っている。

紀州国の廻船船頭伝六が、窪津でクジラの骨槽を買い付け、これを清水浦に停泊しているイサバ船に輸送するよう地元・清水浦の廻船業者・藤五右衛門に依頼した。その藤五右衛門の所有する廻船が黒潮上を漂流したものである。このような事例は、記録には詳細に残っていないだけで、もっと多くの漂流事例があったことであろう。

このように捉えていくと、ジオパーク活動と郷土史は、相通じる点が多い。その接点を手繰り寄せながら、郷土を舞台により斬新な、大胆なジオストーリーを構築していくことが必要だろう。皆で知恵を絞りながら土佐清水でなければ語れない『ジオストーリー集』の集積が待ち遠しい。ジオガイドの養成講座も、是非、郷土史の視点も取り上げてほしい。今後の更なる振興を図るならば、地質オンリーの考え方ではなく、天文や民俗学等の間口の広い学際的な取り組みが不可欠だろう。

## －春の土佐清水市人事異動(令和5年4月1日付け)－

市史編さん室市史編さん係長(生涯学習課生涯学習係長兼務)・由岐 直久氏が、危機管理課課長補佐に昇任・転出しました。刊行まで残り1年であり残念ではありますが、昇任であり、更なる新たな責任ある立場での活躍を祈念します。4年間本当にお世話になりました。

後任には、じんけん課竜串福祉センター館長・津野綾子氏が着任します。併せてよろしくお願い致します。

## \* 高知家遍路道プロジェクト補助金により丸木橋を設置 \*



「日本歴史の道・100選」に選定されている真念庵境内を含む約0.6キロメートルのへんろ道上に丸太橋を設置しました。

設置したのは、真念庵境内南側の墓地から水車側に300メートルほど下った場所です。設置は、あしずり遍路道保存会(弘田之彦会長)に委託して行いました。これによって真念庵境内周辺の遍路道はほぼ整備を終えたこととなります。

また、これに加えて「窪津へんろ道(鯨道)」に点在している丁石・指差し等の遍路関係の道標銘文を読み取り、これを楷書に直した説明板を11枚作製しました。これで道標に刻まれている銘文を読むことができます。説明板の材質は、さびにくいアルミ製で打ち込み式になっています。